

おかしのまほう

奄美市立小宿小学校 一年 いずみ のの

やまのおくに、ちいさなおしろがありました。そのおしろには、ちっちゃなちっちゃなまじよがひとりですんでいました。そのまじよは、まほうであそんでいました。「くるりら。くるりら。」

そういつて、まほうをかけます。すると、おいしそうなおかしがでてきました。ちっちゃなまじよは、そのおかしを、

「おいしそうなおかし。むしゃ、むしゃ。」
と、たべました。

「もつとたべたいな。たくさんだしちゃえ。くるりら。くるりら。くるりら。くるりら。」

たくさんのおかしがでてきました。

「むしゃ、むしゃ。やっぱりおかしは、おいしいな。」
そういつて、ちっちゃなまじよは、おかしをたべつづけてました。

あるひ、ちっちゃなまじよは、おしろがちいさくなっているようなきがしました。おふとんはあしがでているし、といれはちいさくてやりにくくなっていました。

「なんでちいさくなっているのかなあ。」

と、ふしぎそうにいいました。でも、そんなことよりおかしがたべたくなかったので、また、まほうでおかしをだしました。

「くるりら。くるりら。」

ちっちゃなまじよはおかしをたべます。

「あれ。おかしがちいさくなつたきがするな。わたしのてがおおきくなったのかなあ。」

なにかおかしなことがおこっていました。おかしをたべすぎたちっちゃなまじよのからだが、おおきくなつていたのです。

そのことにきがつかないちっちゃなまじよは、どんどんおかしをたべて、どんどんおおきくなりました。そして、

「どっかーん。」

ちっちゃなおしろがこわれてしまいました。ちっちゃなまじよはびっくりしました。

「くるりら。くるりら。おしろよなおれ。」

それでもおしろはなおりません。ちっちゃなまじよは、おかしをだすまほうしかできなかつたのです。

「どうしよう。こまつたな。わたしのおしろ、どうして

こわれたんだろう。」

そして、とてもかなしくなつたちっちゃなまじよは、それからずっとなきました。たくさんなみだがでました。

そのたくさんのなみだで、おおきなみずうみができました。なみだでできたみずうみをみたちっちなまじよは、びっくりしました。

「わたしのからだがおおきくなってる。」

そして、ちっちなまじよはきびきました。

「だから、ちっちなおしろがこわれちゃったのね。」

ちっちなまじよは、おおきなまじよになってまたなきました。

すると、みずうみのなかからちいさなおさかなたちが

おおきなまじよにはなしかけてきました。

「まじよさん、まじよさん、どうしてないているの。」

「なにか、かなしいことでもあったのかい。」

「はなしをきいてあげるよ。」

おおきなまじよは、なきながらはなしました。

「おかしをたくさんたべたら、からだがおおきくなって、

おしろがこわれちゃったの。どうしよう。ええん。え

えん。」

おさかなたちがいました。

「まほうでおしろをつくるのはどうかな。」

「そうだよ。まほうをつかえばいいんだよ。」

おおきなまじよは、かなしそうにいました。

「わたし、おかしをだすまほうしかできないの。」

「それなら、こんなのはどうかい。おかしのおしろをつ

くるのさ。」

おおきなまじよはよろこびました。

「それならわたしにもできるわ。」

「くるりら、くるりら、おかしのおしろでてこい。」

まほうをかけると、おおきくてあまいにおいがするお

きなおしろができました。

おおきなみずうみのそばにあるおかしのおしろで、お

おきなまじよは、いつまでもたのしくくらししました。